



たいしも通信

下関戦跡シリーズ7回目、今回は少し趣向を変え下関市内吉田の奇兵隊陣屋跡について触れます。今回がいつもと異なる理由は、幕末という時代背景と、厳密には戦跡ではなく、かつ施設が自衛隊で言うところの教育隊や術科学校の跡地ということになるからです。

◆奇兵隊陣屋

文久3年(1863年)、萩藩主の命を受けた高杉晋作が馬関に出張し、奇兵隊を結成しました。当初本拠地は廻船問屋の白石正一郎邸(市内竹崎町)に置かれ、規模の拡大に伴い赤間神宮へ移り、さらに慶応元年(1865年)、拠点はこの吉田に移し、慶応3年(1867年)から明治2年(1869年)の解散まで陣屋(本陣)を置き、400人の隊士が厳しい規律に従って訓練に明け暮れました。日課は、毎朝6時起床、8時まで講堂で漢学を学び9時から訓練(軍事教練)といった具合で、また外出も隔日に5人1組で、吉田地区内の散策のみが許可されていたそうです。皆さんの中には教育隊や候補生学校を思い出した方もおられるのではないのでしょうか。ここでは軍事訓練はもとより、文学稽古や読書などにも比較的多くの時間を割いており、隊員の教養向上が図られ、一種の教育機関としての役割も担っていました。

奇兵隊本来の目的は馬関(関門)海峡の警備でしたが、その後全国各地で諸隊も結成され、所帯も大きく膨れ上がり、さらにはその発言力は高杉の意を超え、目的も倒幕へと変化してゆきます。

◆場所について

陣屋跡は下関市吉田、県道260号沿線の少し開けた公園のようになつた場所で、立像や銘板が設置してあります。建物自体は残

っていませんが、関連史跡として少し離れた場所に末富邸があり、説明板もあります。末富家は地元の大庄屋で、奇兵隊はここを本営と定め、会議もここで行われていました。末富家は、物資の調達など奇兵隊の活動を支え、高杉の葬儀も出しています。道路に面した邸宅の外観は近代風にリフォームされていますが、建屋の基本構造、屋根の造りなどに当時の面影を見て取れます。

◆そもそも奇兵隊とは

奇兵隊とは、西部劇に出てくる機動力のある騎兵隊のことではもちろんなく、幕末(江戸時代末期)に結成された藩士と藩士以外の武士・庶民からなる混成部隊のことで、「奇兵」とは「正規兵」の反対語、「奇兵隊」も藩士・武士のみからなる「撰鋒隊」の反対語のことです。

奇兵隊は当時、圧倒的な強さを持つと言われていましたが、その理由は出自や家柄によらない功績に応じた賞罰と、末端まである程度の戦術・戦闘に関する知識を持つ日本初の近代的軍事組織であったためと考えられています。

よく新選組とどちらが強いかと話題になる事がありますが、池田屋旅館の襲撃等、高杉自身をはじめ奇兵隊は痛い目に遭っていますが、新選組は警察機構に近く、また個人技では抜きん出ているものの、いわゆる近代的軍事組織の奇兵隊とは比較することはできないでしょう。

▼▼編集後記▲▲

近代日本史は学校ではあまり触れられない(意図的に封印されている?)ことから、今一つ理解が不足しがちです。しかしせっかくの下関の地の利を使わない手はなく、少しずつでも歴史の表舞台となった実際の土地を訪れ、見聞を深めたいものです。

例によって、内容に関する責任は全て支部長にあり、特に規則等に定めてあるもの以外は私の個人的見解が色濃く反映されていますので、ご意見等ございましたら遠慮なくお知らせ下さい。